University Information

岡山大学 Okayama University
〒700-8530 岡山県岡山市北区津島中1丁目1番1号
URL：https://sdgs.okayama-u.ac.jp/

岡山大学
OKAYAMA UNIVERSITY

SDGsの先へ
― 岡山大学が描くウェルビーイングと未来人材創生

SDGsの先駆者として歩んだ、岡山大学の軌跡

SDGsをいち早く大学経営に組み込み、持続可能な社会の実現に向けた取り組みを、学生そして地域社会とともに展開してきた岡山大学。2005年に、岡山市域が国連大学から世界初のESDに関する地域の拠点(Regional Centre of Expertise on Education for Sustainable Development：RCE)として認定され、ESDを国際社会で先導してきた。2017年には「SDGsに関する岡山大学の行動指針」を策定し、翌年には「SDGs推進本部」を設置。これらの取り組みは、国公立大学で初めて、第1回「ジャパンSDGsアワード」の特別賞「SDGsパートナーシップ賞」を受賞するなど、高く評価されている。そして、2019年度より、SDGsへの貢献を大学経営の中核に置く「SDGs大学経営」をスタートした。現在は、「SDGs推進研究大学」として、持続可能性と多様な幸せを追求している。

ウェルビーイング社会に向けた、SDGsの次なるステージ

SDGsが社会に浸透し、「掲げる」段階から「実装・成果」が求められる段階へと進む今、岡山大学は、学生を主役に地域と地球の課題に取り組む活動を進めている。SDGsを「自分ごと」として取り組む「SDGsアンバサダー」や、文理や学年の枠を超え、技術と大学での学びの成果で問題解決に挑む「DS部」など、自らの興味に基づき挑戦できる場が広がっている。

さらに学生と教職員が協働した活動として、「デジタル田園健康特区」に指定された岡山県吉備中央町において、医療や福祉のデジタル化により中山間地域の課題解決に挑戦。「DXサンライズおかやま」では、カーボンフットプリント算定や温室効果ガス排出量モデル算定に取り組み、地域企業の「脱炭素経営」を支援している。こうした実践を積み重ねながら、岡山大学は今後、SDGsの先にあるウェルビーイングの実現に向けて、マルチステークホルダーの持続的で多様な幸せを追求する。

学生主体で進む、岡山大学 SDGs の取り組み

PICK UP　岡山から世界へ、学生が立ち上げた対話と発信の舞台― TEDx Okayama University 実行委員会

「まるで会社を立ち上げるような経験」だったと主催者の一人Lin Thu Kha Htaik (William)さんが振り返るこの活動。もう一人の主催者岡田栞那さんとともに、「岡山の声を世界に届けられる場をつくりたい」と、地域の学生をエンパワーしたい強い思いから行動を起こし、ライセンスの取得、広報、約200万円の資金調達、スピーカー選定、サイドイベントの企画、当日の運営まですべてを学生が主体的に担った。

このTED Talksは、プレゼンテーションを通じて価値あるアイデアを世界に広めることを目的とする、世界的に知られるコンテンツだ。中四国地方での初開催に挑んだのが、冒頭のお二人をはじめ学生主体で立ち上げた「TEDx Okayama University実行委員会」だった。岡山大学「グローバル・ディスカバリー・プログラム(GDP)」に所属する多国籍の学生を中心に、慶應義塾大学や福井大学など他大学の学生も加わり、約40名体制でスタートした。

今回のイベントテーマは「BRICKS(レンガ)」。来場した高校生からも「刺激を受けた」との声が寄せられた。一人ひとりの挑戦やアイデアを、未来を築く「レンガ」に見立て、多様なスピーカーが熱のこもったメッセージを発信し、若者が同世代に響かせるイベントとしての力を発揮した。一過性の取り組みで終わらせないために、運営体制やノウハウを次年度以降へ引き継ぐ制度づくりも行い、継続的な学びと挑戦の場としての発展を目指している。

主催二人による閉会挨拶(左：Williamさん、右：岡田さん)

PICK UP　生成 AI で、老舗企業のデザイン課題を解決へ― OI-Start × 株式会社協同 × 岡山大学竹内研究室

「予算面でラボの整備が難しい中小企業こそ、大学の先進的な研究とつながる『OI-Start』の場を活用してほしい」と地元企業・株式会社協同の西川源徳社長。この「OI-Start」は、岡山県が設置し、岡山大学が運営するプラットフォームであり、地域企業が抱えるリアルな課題を産学官連携によって解決することを目的としている。100機関を超える会員のうち、学生服のワッペンやボタンを製作する同社はその一社で、提案デザインのうち未採用となった案の活用方法に課題を抱えていた。

「研究の成果が実社会に反映される可能性があるという貴重な経験だ」とは、共創で挑んだ学生・藤本竜也さん。岡山県の「産学連携スタート補助金」も活用しつつ、彼が所属する情報工学を専門とする環境生命自然科学学域の竹内孔一准教授とともに、同社から提供された過去のデザイン案と関連情報を学習データとして整理し、プロンプト(指示文)に応じて新しいデザイン案を自動生成するAIモデルを構築した。「実用に足る」デザインが安定的に生成されるまで、試行錯誤と丁寧な対話を重ね、同社のデザイナーからも高い評価を得るまでに至った。

「OI-Start」は、学生・企業・教職員の共創を積み重ねながら、地域社会に根ざしたイノベーションを広げていく。

対話を重ねる西川社長(中央)、竹内准教授(左)、藤本さん(右)